宗祖 法然上人 800回大遠忌

通信

宗祖 法然上人800回大遠忌記念

法然上人と今、すべてのいのち

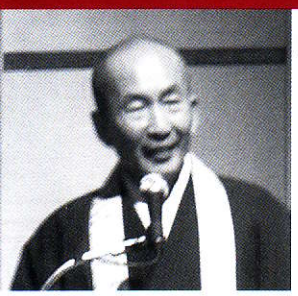
兵庫県大会　浄土宗西山禅林寺派 総本山永観堂禅林寺

平成23年4月25日(月)～5月1日(日)

総本山 永観堂禅林寺

「法然上人と今、すべてのいのち」兵庫県大会
全国のトップを切って開催され、感動のドラマを展開！

平成十九年三月九日、兵庫県の高砂市福祉保健センターにおいて、法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」兵庫県大会が開かれました。寺院から出て、このような記念大会が行われるのは初めて。宗門、檀信徒、一般の人からも、期待と注目を集め開催され、大きな感動の渦を巻き起こし、法悦の世界へと導きました。


開幕までに一枚起請文の指導をする中西玄禮師

熱心な兵庫県檀信徒で満席

永観堂の梵鐘が響き渡り、幕が開く。舞台中央に六字の名号、上手に法然上人像が映し出され、舞台下手に毎日放送の柏木宏之氏が登場。「只今より、浄土宗西山禅林寺派総本山永観堂禅林寺によります法然上人800回大遠忌記念『法然上人と今、すべてのいのち』兵庫県大会を開催させていただきます」と宣せられます。

当日は、春の陽光を感じる気持ちのいい日となり、同センターで午前中、入念な準備とリハーサルが行われ、午後一時半の開演には、400人の会場はいっぱいになり、皆さんに期待と喜びがあふれていました。

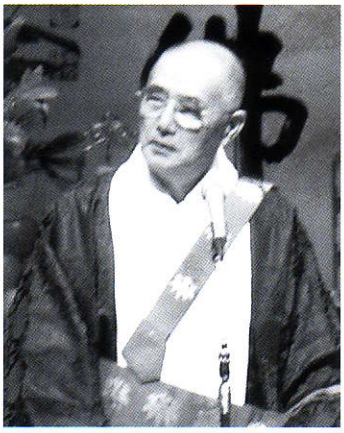
開会の辞を述べる鬼頭誠英宗務総長

開会にさきだち、宗務総長鬼頭誠英氏の挨拶で始まり「お念仏は法然上人のお教えを信仰するわたくしたちのいのちです。日々の生活は思いもかけないことに出会い、思い煩いの連続です。でもこの世にいのちを受けた時から実は仏様に願われているのです。悔いなきいのちを生きよと。どうぞお念仏を喜び、あの苦労があったからというた一度きりの人生を全うしていただきたいと思います。主催者といたしましてこの催しをとおして、なにかを感じていただければたいへん幸甚です」とお話になり、大会が始まりました。

次のいのちのために生きていく

最初の法話は、山口市長寿寺の中村隆芳師、「他者のために」と題して。

法然上人はすべての人が救われる法を求めて長い年月勉学と修行をされた結果、ただ一心に南無阿弥陀仏と唱えることだとさとられた。私なりにそれを考えてみると①法然上人の自分を見つめる目の厳しさと長い修行で、すべての人が救われる道がはるか昔に御仏によって用意されていたことを確信された。②他者があって初めてこの身が存在する。人生とは他者とのかかわりの中にあり、これが阿弥陀さまの慈悲の根源である。③私達はなぜ死ぬのか、それは後に続く人たちに迷惑をかけない、つまり他者のため。阿弥陀さまの本願も法然さまの教えも他者のために生きることを教えているのです。と説かれました。

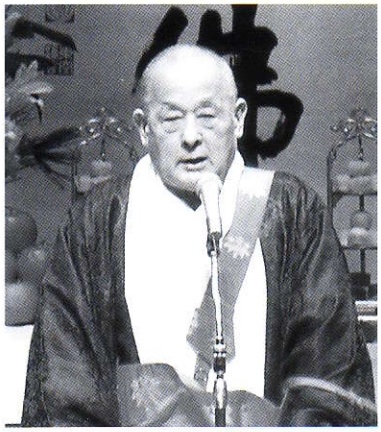

「他者のために」と題して中村隆芳師

今回の司会者は毎日放送の柏木浩之氏

お念仏を通じて阿弥陀さんの慈悲を

続いて、京都市宝幢寺の釋真行師の法話「仏さまに抱かれて」と題して。

法然上人につかえ、ともに念仏をとなえてこられた西山国師の歌から始まり介護の話へ。高齢となり介護が必要で痴ほうも現れたお母さんを介護された娘さんが書かれた本の話。高齢のお母さんは最近の事は話さないが、菩提寺に月に一回お参りして法話を聞き、念仏を唱えた昔の事は良く覚えている。そしていのちあるものは死ぬのは決まっているから阿弥陀さまにおまかせすればよい、というのが口癖だった。そのとおりの最後で、病院の看護士さんたちからも喜ばれる最後であった。菩提寺のご住職に、そういう人を妙好人（行状の立派な念仏者）というと教えられ、娘さんはお母さんの念仏信仰が深かったことにあらためて気付かされた、というのです。阿弥陀さまの大悲をいただいて日暮らしをさせていただき、息を引き取るときにも静かに逝きたいものだと締めくくられました。


「仏さんに抱かれて」をテーマに釋真行師

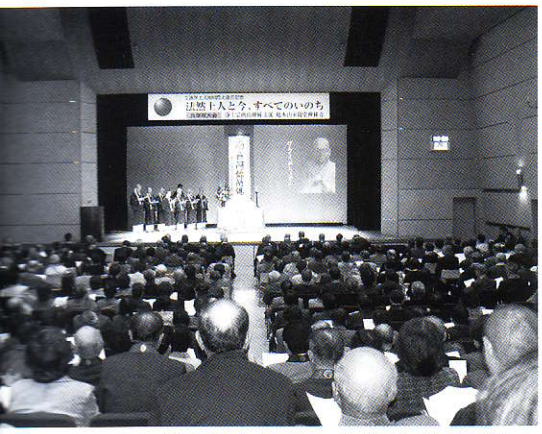
調和のとれたハーモニーと荘厳な調子で進行

六字の名号が輝き、荘厳な読経に感動

続いて小木曽善龍猊下と法事部の僧侶で特別法要が執り行われました。

緞帳が上がると舞台中央の名号にスポットライトがあたり、緋の衣の猊下を中心に十三人の僧侶が整然と並び、会場からは思わずどよめきが起こりました。ゆるやかに厳かに読経が始まり会場は法悦に満たされました。

御親教で猊下が、「本日はみなさんといっしょに法然上人の徳を頂いて念仏が出来る、こんなに嬉しいことはない。阿弥陀さまの本願を信じて理屈や知者の振るまいをせず念仏をとなえることが大事だ」といって南無阿弥陀仏と唱えられると、会場の全員の心もひとつになり、大きな感動をあたえました。

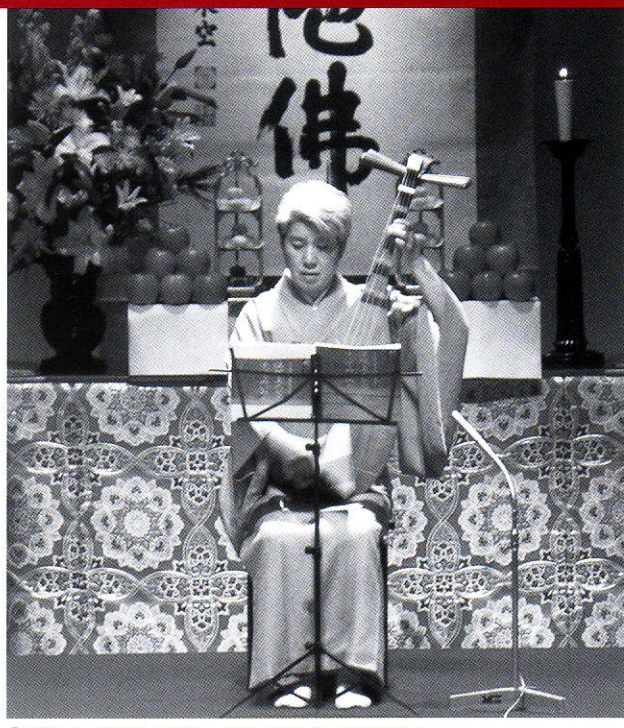

パイプ椅子を入れ、400人ぎっしりの会場

古屋さんの法然上人物語に大喝采！

第二部は古屋和子さんによる琵琶で語る「法然上人物語」。

「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり～」哀切帯びた琵琶の音にのせて、古屋さんの太い力強い声が響く。

末法八十一年、勢至丸は美作（岡山県）で生を受け、幼くして父が殺害されるという事件に遭う。父の遺言「敵は打つな、敵を恨んではならぬ。敵は敵を生んで尽きることなし。わしの菩提を弔え」という言葉を守り、出家し比叡山に上る。比叡山で経典を読み、修行するも疑問を感じ、十八歳で名聞利養もいらぬ遁世念仏の生活をと西塔黒谷の叡空のもとに入る。高僧の地位が家柄や身分で決められた当時の比叡山に希望をいだけなかったのであろう。二十四の年、源空は山から下り清涼寺釈迦堂に参籠する。そこで目にしたのは、争乱の予感に怯え、生きる光りを必死で求める庶民の姿だった。この人々を救う道は無いのか？ある夜、源空は善導大師の著した観経疏を読んでいると、「一心に専ら弥陀の名号を念じ　行住坐臥に　時節の久近を問わず　念々に捨てざるもの　これを正定の業となづく　彼の仏の願いに順ずるが故に……」これだ！弥陀の称号を念ぜよ　散善義の一節であった。源空は勉学と修行を重ね、ついに専修念仏の教えに至った。三十年の月日が流れ、法難にあい土佐に配流になり、赦免され京に戻り善恵房証空との再会、撰択集の撰述のときの勘文の役の思い出話を、そして最後の入滅のシーンなどが琵琶の響きに乗せて語られていきました。時に厳かに時につぶやくように語られると、会場のみんなはあたかも法然さまの時代に生き法然さまの身近にいる感じがしてくるのでした。



「法然上人物語」を熱っぽく語る古屋和子さん

深い感動と熱い感激の連続

感激さめやらぬうちに幕が下り、ふたたび幕が開き古屋さんが登場。古屋さんの指導で会場のみんなで「一枚起請文」を一節ずつ唱和し、最後に通して全文をみんなで唱和。会場割れんばかりに大合唱。感動的なフィナーレを迎えました。

「一枚起請文」を会場全員で唱える、古屋さんと法事部

そして兵庫県の宗務支所長　榊原康修師が「この感動を胸に、平成二十三年本山で行われる大遠忌につなげていただきたい」と閉会の挨拶をされ終了しました。

会場の皆さんはどなたも大いなる感動を受け、心から満足されていました。そのなかの一人、加古川市の水埜さんは「貴重な経験をさせてもらいました。中村隆芳師の『他者のために』には感銘をうけました。死に対する恐怖がありますが、今日の話で光を感じました。」といわれました。また、網干の森下さんは「ふだんはお彼岸やお盆にお寺にお参りするくらいですが、今回の催しには大変感動しました。」とのことでした。

「閉会の辞」を述べる榊原兵庫県支所長

第三回 法然上人を歩く旅

出雲街道を東進、美作から播磨へ

三月十一日(日)、第三回「法然上人を歩く旅」がおこなわれました。

今回も京都駅からバスが仕立てられ、二十四人が乗り込みました。岡山県の林野駅に向かう間、天気は雨から雪と目まぐるしく変わり不安定。暖冬だといわれた今年の冬でしたが三月に入りむしろ寒い日が多く、当日も気温十度、風の冷たい日となりました。

林野駅には岡山県や兵庫県からの参加者も加わり総勢三十七名。駅前で記念撮影後、午前十一時に林野駅を出発。

岡山県JR林野駅に37名集合

今回は美作土居まで十五キロの道のりです。歩き始めてすぐに梶並川にかかる橋を渡ると林野の集落が続き、後醍醐天皇ゆかりの神社を左手に見て、川に沿って南下。やがていかにも旧街道らしく歴史の重みを感じさせる林野の町並みの風情と出会う。

一時間歩いたところの平田で休憩、といっても食事は出発前に済ませているので、立ち止まって一息入れる程度。あたりはいくつもの低い山に囲まれた畑や田んぼで、人家もそんなに多くは無く、全くのんびりした田園風景。そんな吉野川沿いの土道を歩いていると、まだ十代だった法然上人ももっと鄙びていたであろうこの道を通って京を目指されたのかと、想像された。

平田で一息いれて元気に歩き始める

伏鉦で歩く調子に弾みをつけました

第二回目の休憩は「美作しいたけ園」で。ここは天皇陛下が皇太子時代にご覧になったとか。しいたけの香りのする温かいお茶をいただき、元気をいただきました。この頃になると晴れてきて青空に白い雲も浮かび、紅白の梅、白いこぶし、黄色いれんぎょうなどが咲いていて、ここは少し春めいていました。さらに、吉野川の土手を歩き、国道へ出て、姫新線の踏み切りを渡りさらに東進する。道中みかけた桜の木はどれも蕾固し。しかしかなたの木立からふいに鶯の声が聞え、春はもう間近か。また悠然と飛ぶトンビや青サギの姿もありました。

北原のしいたけ園を眺めながら

一里塚のある土居の宿

三回目の休憩もやはり一息入れる程度。ここで遅れてこられた方が加わり一行三十八名。美作江見駅を通り過ぎ江見の町へと進みます。坂を登っていくと、杉坂峠へ。このあたりは播磨と美作の国境いで古代から京都と出雲の間の重要な交通路だったところです。

峠を迂回するように北側の国道に添って南下する。上福原に出て山家川沿いを歩く。行き交う人の姿も無く、ところどころの家で犬にほえられる程度、川沿いの道をたどり、そばを通る一両だけの姫新線を目で追いつつ、黒い屋根瓦の農家が点在する路をのんびりと歩く。

午後三時五分、JR美作土居の駅に到着。今回も全員無事到着しました。山里を歩き、「山笑う」の季語のように早春賦を味わう旅でした。

平原あたりの土手道を歩く

清流の吉野川の土手をゆく

「宗祖法然上人800回大遠忌」記念事業着々と進む！

「法然上人と今、すべてのいのち」記念大会は、去る三月九日、兵庫県高砂市福祉保健センターで開催され大きな感動の渦を巻き起こし成功裡に終わりました。引き続き今年の十月四日に東京大会を増上寺で開く予定です。また、「一枚起請文」写経運動も順調に推移して、現在1,800部の写経セットの売れゆきを示し、全国から本山に続々写経されたものが奉納されています。「法然上人を歩く旅」も 第3回を数え、誕生寺を出発して現在、美作土居まで歩みを進めました。そしてこの秋から「法然上人への絵手紙募集」が始まります。いよいよ「宗祖法然上人800回大遠忌」の記念事業の本番が始まります。

大遠忌記念大会を開催

全国檀信徒に感動をあたえ、お念仏の輪をひろげましょう。

「法然上人と今、すべてのいのち」をテーマに繰り広げられる宗祖法然上人800回大遠忌。もう一度、法然上人の業績を顕彰し、宗派としてさらなる発展に向けて前進していくときです。また、全国の檀信徒さんに感動をあたえ、お念仏の輪をひろげるときです。

三月九日兵庫県高砂市福祉保健センターで開かれた「法然上人と今、すべてのいのち」兵庫県大会にひきつづいて、十月四日に、東京大会を芝増上寺で。さらに平成二十年十月に岐阜大会を、平成二十一年十月、愛知大会を、そして平成二十二年十月、京都大会が計画され、この催しに向けて着々と準備がすすめられています。

「一枚起請文」を写経

法然上人の「一枚起請文」を全国にひろめましょう。

法然上人が一二一二年(建暦二年)、門弟源智の願いにより浄土往生の要義を一枚の紙に和文で記されたのが一枚起請文です。

口称念仏こそ本願の念仏にほかならぬことを述べ、また無知なものと同じように、自身を一文不知の愚鈍の身におとし、専ら念仏すべきことを説いています。短い文章ですが、専修念仏の要旨が簡潔に説かれています。この「一枚起請文」を全国の檀信徒さんに写経していただき、本山に納めていただきます。写経用紙として、手本、写経用紙をセットにして、一般寺院を通じて檀信徒さんに千円で配布。写経したものを本山に奉納していただき、本山で奉納回向をして、御影堂下にもうけた特設納経庫に祀ります。お寺で写経会を開き、解説及び実践をしていただき「一枚起請文」の布教に努めてください。

法然上人への絵手紙募集

念仏する喜びに気づかれた法然上人の目線に立って、この喜びを未来に伝えましょう。

特に青少年の方に、八百年前の法然さんに手紙を出すという仮想のなかで、未来への想いを語っていただくというもの。平成十八年～二十二年「法然さんへの絵手紙」募集として全国へ発信。

地方記念事業での告知とともに、全国紙、地方紙に配信。また、月刊「公募ガイド」等を活用します。

期間が長期となることから、三回にわけて募集。各回優秀作品を選定し、入選者に賞品を贈ります。募集期間は、

第一回、平成十九年十月～十二月、
第二回、平成二十年十月～十二月、
第三回、平成二十一年十月～十二月
第四回、平成二十二年十月～十二月

で、テーマは「法然上人と今、すべてのいのち」。くわしい応募要綱は事務局までお問い合わせください。

法然上人を歩く旅

法然上人の行跡を顕彰し、その功績をしのびましょう。

岡山誕生寺から比叡山延暦寺まで、約二百七十キロを十四回にわけて歩きます。

第一回、平成十八年十月九日、誕生寺から津山まで 十六・五キロ。

第二回、平成十八年十二月三日津山から林野まで、一七キロ。第三回、林野から美作土居まで十五キロ。と歩いてきました。

第四回を五月十三日(日)、美作土居から播磨徳久まで十八・五キロを計画しています。現在四十数名の参加者、まだ数名の参加ができます。法然上人を偲ぶために、自己の健康の為にご参加ください。交通費は自己負担といたします。賞品として、百マイル賞デジカメ一台、五十マイル賞ハイキングバッグ三名(抽選)を用意しています。

くわしい応募要綱は事務局までお問い合わせください。

発行所
宗祖法然上人800回大遠忌記念事業事務局
〒六〇六－八四四五 京都市左京区永観堂町四八
電話 〇七五－七六一－〇〇〇七
FAX 〇七五－七七一－四二四三
Eメール zenrinji@eikando.or.jp
二〇〇七年四月二十五日発行